

展示技法の事柄などから・・・

森山 哲和 (考古造形研究所)

1. 視点の多様性

生命の星・地球博物館（以下、館という）の展示の目的や意図については、学芸員や設計者との十分な検討とディスカッションの積み重ねの中で行われ、さらにそれを構造技術陣・造形技術陣など、建ちあげる役柄の人々との連携での完成でありますから、その成果は、開館とともに多方面から注目を集めた特異な博物館となっているのは周知の事実です。博物館建造物は、近年ますます大きさを競っているように見えますが、実のところそうばかりではないと思います。その規模というものは、当局や当事者の持ちあえている表現主題の原寸や比重における内容の成熟中で考察され、そして、必要最大限において必然的規模として登場しているといった方が正しいのでしょう。

館の規模について述べるならば、やはり館の収集能力や資料の保持能力の上に成り立つ結果であり、それを表現素材（媒体）として、県民や一般の人々に還元と構成などできる能力の有無の上に成り立つ必然的な大きさだと思えます。またそれに伴う展示技術や視点もその側面を担うものです。そこで、館の構成に伴う展示の設定、展示物の考え方、展示の可能性などについて少し述べてみましょう。

まず展示の設定ですが、建造物および展示室内（大空間）が大きいと言うことは、一般来館者も含めて単一物を観る視点性が常識的でなくなる場面が多々生じてくるものです。比較の問題として、日頃慣れていないと言う事柄だけでなく、相対的視野という内容も含んでいるからです。これは、構造・構成の側の人も同じです。設計上、机上や図面上等で十分な検討が行われていますが、会場展示内の臨場感や空間感等の外貌からの刺激については、展示のときに会場で当面しながら調整しなければならないわけです。館の展示思考も、そのあたりは同じ発想であったかに思います。しかし、臨場質・空間の相対質の内容は多面的多様性であり、当面処理では物理的に時間的に遅い局面

が生じてきます。それで今回の展示の取り組みの考えのなかに単一物の資料羅列と、さらに即物資料という概念を設定して取り組んだことです。即物資料という考え方は、単一物の資料も含みますが、相対的要素やそのフィールドにおける特質構造も表現素材（媒体）の範囲も含むことです。したがって、会場展示以前の作業が要求されますが、その結果は有機的要素を取り込んだ内容が可能になります。さらに遂行上の注意力や理解力を共有する事もできていると思っています。よって、即物資料の採り方や活用の方法等を整理分類した作業写真などを交えて述べてみましょう。

○即物資料その1

資料の「原寸大」や「実物大」です。この「実物大」とは単一物の事ですが、即物資料はシチュエーションや、原位置再生的意味も含みますので、「原寸大」ということになります。つまり、相対的空間もまたその要素だからです。

○即物資料その2

「空間表現」では、野外の自然立地物を造形力で抽出する事です。縮尺・拡大模型やジオラマ模型等の造形模型とは違う表現であり、それはフィールドの生の自然形態から室内展示物に推移させる事でもあります。したがって、これを行う素材の選択・薬材の操作、それに抽出力等の造形手腕が要求されます。それによって自然界における形状や移動不可能な形態（地層・地形）等、空間構造物が室内表現物として、また臨場

感として表現活用されることです。

○即物資料その3

「基調イメージ」です。これが本来一番重要なものです。その1や2の中にも当然この基調が解決されているわけですが、基調イメージには、とくに展示場における総合において重要性があるのでいくつか述べてみましょう。

基調イメージには、色・用語・形象・形態・比例等が確認できます。基調色や基調形象等は当然であります。基調用語や基調形態的イメージは展示活動を行う側にも非常に参考になり、また、意識の共通性も必要になってくるでしょう。そこで即物資料の基調中で、その即物資料の名称や呼び名を付けて位置づけすることです。展示や収集の目的のなかで、その意味の輪郭が形状となり、室内空間の展示場に推移してきたわけでありますから、そこにはもう自然の模倣物でなく、また、資料の単一物でもない形態となっているのです。そこで表現用語の基調用語が待たれることです。そのことによって室内資料の確立が創成されるわけです。この意味は生態学のフィールドでも考えられます。自然形態の空間位置において、林床・林冠・水中・陸上・空中・無重力などの視点的、座標軸の認知です。それによって、より解りやすく表現要素として確立させられます。昨今、生態系の調査研究テーマで空中の座標軸における固定的調査法。たとえば、林冠部（樹冠部）の空中歩廊の調査等、その調



図1. 枕状溶岩の採集から展示までの様子。

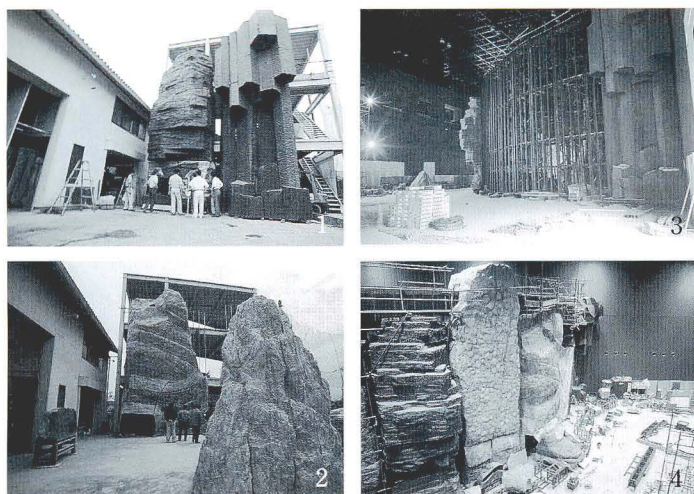


図2.岩石壁を組み上げる様子。

査方法や器具の開発は各国が競ってアイデアを出している様子は周知のことでありましょう。ここで問題にしたいのはその資料の表現法、つまり室内展示の位置づけの確立です。やがて野外資料の視点が室内資料に推移する場面で、視点的座標軸、つまり俯瞰とか仰角とか人間の位置感覚の認識が必要となるのでしょうし、また、基調形態の共通性の確立が重要性を持つてくるでしょう。以上のような意味を踏まえて今回の展示に取り組んだので、建造物竣工の様子も含め即物資料の採取の様子など一連の記録フィルムを掲載しましょう。

2. 視点の活用の今後

館の特色は、展示の表現法にあると思います。それがまた博物館のシンボリックになっているようです。それを要約するならば、さしづめ次のような言葉で表現されるでしょう。《身近な自然》《身近な理解》、そして《身近な持て成し》とでも申しましょうか。とてもソフトでしかも制御の整った自然史博物館となっていると思います。専門分野という器の中で、片方一般人の自然に対する関心事は、早いペースで台頭してきております。さらに、いろいろな新発見・新事実の情報も刻々と集まってきているなかで、それに対する情報の選択の目を見張る確かさ等もその一つです。

専門分野の真理・真実を追求する側と、情報をより早くより良く理解を求めている一般市民との差は、隣り合わせになっているような気がします。“身

近な”という表現は、その辺の意味も含んでいます。館としては、さらにこの科学に対する驚きや好奇心についての対応をますます充実していかなければならないことでしょう。そこで、《身近な自然》《身近な理解》《身近な持て成し》の窓口から感想を述べましょう。

《身近な自然》では自然の仕組みなど学習レベルでは充分に応えられていて資料や表現力でも申し分ない説明が出来ていると思います。これを基台にして、物証を動的物証へ、つまり三次元から四次元的時空的への表現法でパラドックス再生も可能でしょう。たとえば植物遷移等で述べるならば、常緑針葉樹・照葉樹林等その極相林の極相、ウィルダネス（原生自然）等、現存しない原生森林風景およびエコロジーの再生表現など、また気象環境で考えられる事は、三次元を四次元的推移によって時空表現を試みる。たとえば、氷河期を巻き込む地球規模の海洋大循環。その変動と反動で起こる地域的事件（ヤンガードリアス）等との気象の変化によって起こす地球の大ドラマの疑似体験やシミュレーション化。つまり物質循環ではサンゴ、動物であり植物であり鉱物であることの推移メカニズム。物質循環構造から動的表現を使い、三次元的視点から四次元的時空再生を試みるなど、パラドックス効果として表現できてくると思います。

《身近な理解》で最大に評価できるのは、プリュームテクニクスの話ではないだろうか。大胆な仮説でこんなに正確にスッキリと地球の理解を引き出せるとは、地球のメカニズムの説明が

芽づる式にスルスルと理解に向けて滑り出しているようです。この際、これを踏み台にして、もっとプリュームテクニクスの事を前面に押し出す必要すら感じます。また、理解の手助けのなかには、仕組みの完結さやドラマ的構築性等も大いに役に立ちますが、さらに物質の説明をしたり、理解に結びつけたりする場合、人物登場による表現もありましょう。たとえば、“ジョン・ミューア”に登場願ひ、米カリフォルニアのヨセミテ公園の話。文学者“ゲーテ”には色彩論にまつわる物や色の見え方の話などにより、自然科学と人間心理の密接な関わりと側面的活動の自然科学の成果として理解が向上できると思われまふ。

《身近な持て成し》については、触覚的展示法や学芸員の友好的指導は定評あることです。野外観察等の参加希望者の数を見れば、隠れたベストセラー的存在なのです。そこで屋外では、さらに触覚的活用として、川岸の向岸や山際への空中歩廊など直接川辺や林床に触れずに、樹冠部等を観察できるシステム等屋内では触覚的資料（単一物・単品資料）の触覚開放展示。速報コーナーとしては地球情報、地球環境問題や新情報版トピックスコーナー方式で現時点でのリアルタイム表現など。また、展示と直接関係ないものですが、ミュージアムショップの事。この件はビジネス的発想に結びつけて受け取られる傾向がありますが、これも博物館の顔だと思っています。来館者にとっては、公私共有に考えていることですし、博物館に訪れた意味を自分の意志で確認しているともとれます。そこで、この意味を《身近な持て成し》で考えるならば、“御持て成し”的に解釈されるべきでしょう。品質の向上や品質選定・開発に目を向け生命の星・地球博物館にふさわしいレベルを生み出したいものです。

最後に、この限りある自然の恵みと驚きは一人ひとりに受け継がれ、「人間にはパンと同じように美が必要だ。」のジョン・ミューアのような人物を生み送り出したいものです。

（編集注；森山氏には当博物館の建設にあたり、展示・技術アドバイザーとしてご指導をいただきました。）